TACパワーアップ大会2019を開催!!

12回目となる今年のTACパワーアップ大会は、①労働力支援の実践や農業ICTなど先進営農技術の導入等による農業生産の維持拡大②JAグループの総合力を発揮した担い手への総合事業提案③出向く態勢の拡充によるTAC活動の強化――をテーマに活気あふれる大会となりました。

JA全農は11月14、15の両日、「TACパワーアップ大会2019」を横浜市で開催しました。地域農業の担い手に出向くJA担当者(愛称TAC=タック)の活動成果を共有する全国大会として、約550人が参加しました。12回目となる今回は労働力支援の実践やスマート農業の導入等による農業生産の維持拡大、JAグループならではの担い手への総合事業提案などをテーマに掲げました。優れた活動を行うJAやTACの表彰と事例発表、基調講演や大会宣言の採択の他、TACの体制と人材育成、担い手が求めるスマート農業など5つのテーマで分科会を開催しました。

大会あいさつで全農の長澤康農会長は、TACの活動について「農業ICTなどの先進営農技術の導入や事業承継支援、災害からの復旧支援など活動域が広がる中、地域のリーダーとして、担い手多様な期待に応え、農業、農村の発展に意欲的に取り組んでいると評価。今回の大会を通じ、お互いの知見や情報を交換し合い、将来ある、き農業の姿を喚起することは日本農業のために意義深く、全農として、最先端の農業技術や経営振興に役立つ情報をTACに届け、TACの活動を全力でサポートする」とエールを送りました。

地域のリーダーとしてTACの活躍に期待する全農の長澤会長

組合員に寄り添った活動を称賛する農水省経営局の倉重審議官

生産現場ではJAの協力が不可欠と訴えるJA全青協の今野会長

来賓としてあいさつした農林水産省経営局の倉重泰彦審議官は「多くのTACが活動は組合員に寄り添って、農業者の所得向上や地域の活性化などに取り組んでいる。JAの自己改革はそういった取り組みに加え、世の中の大きな動きも念頭に置いて進めていくことが必要」と訴えました。

JA全青協の今野邦仁会長は担い手の立場として「生産現場の状況が刻々と変わっていく中、JAの協力が必要不可欠」と訴え、「食料を安定的に供給する責務を果たすためにも、この大会から新たなイノベーションを全国各地へ送り出してほしい」と呼びかけました。

基調講演は石川県能美市で水稲を中心に作付けを行い、6次産業化商品やスマート農業などにも積極的に取り組む有限会社たけもと農場の竹本彰吾代表取締役が「JAグループよ 日本農業の希望たれ」と題し、講演しました。

TACは2018年度の実績で、全国261JAの8841人が、約7万7千戸の担い手を訪問し、年間約63万件の面談を行いました。大会ではTACのさらなる飛躍を目指して①担い手の声に向き合い、JAグループの力を結集して応えます②担い手とともに活力ある地域づくりを目指します③TACの輪を広げ、日本農業の未来を切り拓きます――とする「大会宣言」を採択しました。

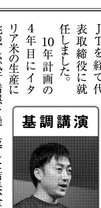
全農会長賞の表彰を受ける岩手県JA新いわての芦谷推行常務理事

大会宣言を読み上げる新潟県JA佐渡の高橋華奈さん

全農会長賞を受賞し事例発表するJA新いわての八重樫修一さん

約550人が集まったTACパワーアップ大会2019

基調講演



「JAグループよ 日本農業の希望たれ」

有限会社たけもと農場　竹本彰吾代表取締役

大学を卒業後、「就農10年で代表を代わる」と父と約束してたけもと農場に入社し、経営継承10年計画を基にOJTを経て代表取締役に就任しました。

10年計画の4年目にイタリア米の生産に挑戦し、試行錯誤を繰り返した結果、全国の実者から認められました。新たな市場開拓を通じて「売る」力が培われ、たけもと農場の強みとなり、今ではリゾットセットやグラノーラといった6次産業化にも取り組んでいます。

業務改善の取り組みでは、「自ら動く」農家集団に成長することで、経営の効率化につながっています。また農業ICT技術にも積極的に取り組んでおり、今後はシステム間の連携により営農管理システム「Z－GIS」にすべての情報が集まることを期待します。

JAグループには農家に寄り添って営農支援をすすめてもらい、「農業をなりたい職業ナンバーワンに」という目標に向かって、ともに取り組んでいきたいと思います。

担い手向け TAC通信表彰

新潟県 JA佐渡
「営農かわら版」として、月ごとに助成金、税務、営農に関する情報を掲載し、担い手に有益な情報をタイムリーに届けている。農家の悩みや不安解消につながるようベテラン担い手のノウハウを紹介し、担い手同士の関係を構築している。

滋賀県 JA東びわこ
JAからの情報発信に加え、担い手からの要望や質問の回答を掲載し、担い手とのコミュニケーション向上につながるようTAC全員で検討し作成している。JA内部の各部署に配布し、部門間連携や情報共有にもつなげている。

滋賀県 JA北びわこ
「農家が知りたい情報」や「JAとして伝えたい情報」、「JAが組合員に提案したい共同の取り組み」として内容を統一し、毎月1、2回発信。「農家組合員の所得増大プロジェクト」は専用コーナーを設けて継続的に掲載している。

兵庫県 JAたじま
「経営改善に寄与するための情報提供」として特に要望がある情報や品目提案を追加し、ページ数の拡大、充実を図った。グローバルGAPの改善活動に関するノウハウを連載し、訪問先の経営改善活動につなげている。

JA表彰

①担い手への提案内容や成果
②TAC活動のJA事業への貢献
――が優れたJAを表彰しました。
(最優秀賞が全農会長賞)

JA表彰 全農会長賞

岩手県 JA新いわて

水稲主体の担い手に対して「農家手取り最大化プロジェクト」のモデルとして、営農、経営課題に応じたコスト低減・省力化・生産性向上などの実践メニューを提案し、所得向上と面積拡大を実現した。ドローンによる水稲直播作業の試験では、は種・育苗・移植作業時間が大幅に削減した。ブロッコリー産地の夏場の品質保持対策やブランド力向上のため、グローバルGAP(農業生産工程管理)の認証取得を支援し、作付面積、販売高向上に寄与した。JAと若手の女性農業者が関わる企画を実施し、共同で調査・研究に取り組んだ。

JA表彰

兵庫県 JAたじま

担い手への土地の集積や集落営農の組織化などに伴う課題に対して「Z－GIS」を提案し、ほ場情報や栽培管理の効率化につなげ、担い手の経営改善に寄与した。グローバルGAPや有機JAS(日本農林規格)認証ほ場の情報管理においても活用を図っている。水稲経営体に対して多収穫米をはじめ、小豆の省力化栽培を提案し、作期分散による作業効率化と年間を通じた販売収入の確保を図った。主力特産品であるピーマンの作業時間や必要な労働力の分析を踏まえた栽培モデルを作成し、作付け拡大に向けた栽培実証を開始した。

JA表彰

福岡県 JA筑前あさくら

九州北部豪雨災害の被害を受けた柿農家にアスパラガスの新規導入による複合経営を提案し、営農の継続を支援した。アスパラガス生産者不在の地区では「杷木久喜宮JAファームプロジェクト」を立ち上げ、生産支援体制を構築している。新規就農者に対して、「新規就農支援センター」を設立し、研修受け入れ農家の組織化を図った。募集から研修、就農に至るまでの一貫した支援体制を整備し、就農後の安定した農業経営に寄与した。水稲生産者の要望に対して、高密度は種の試験を行い労力軽減とコスト削減を実証した。

JA表彰

福岡県 JAふくおか八女

JA独自の「農業生産基盤強化支援事業」を活用し、市場と連携しながら地域に応じた野菜の導入提案を行い、新規作物の作付面積拡大や生産基盤拡大、担い手の所得向上に貢献した。「農家手取り最大化」の取り組みとして、土地利用型経営体に対して、密苗移植栽培技術、流し込み施肥、ドローンによる農薬散布など複数の営農技術メニューを提案し、生産コストと労力の削減により所得増大につなげた。さらに施設園芸(イチゴ)導入による複合経営を提案し、育苗施設の導入や労働力の周年雇用対策、事業承継の支援等により、経営の安定化を図った。

TAC表彰 受賞者

担い手ニーズに応じた提案や地域活性化につながる取り組みなど、優れた成果を上げたTACを表彰しました。

埼玉県 JA埼玉中央
宮澤 直樹氏
有機栽培農家との関係構築～地域農業の維持を目的としたTAC活動～
JAとの関係が希薄だった有機栽培農家に対し、定期訪問でJAとの接点をつくり、課題であったパイプハウスの補強技術提案や講習会を開催した。さらに全農青果ステーションを活用して合理的な物流を実現した。また共同生産者組織を立ち上げ、物流コスト低減による所得向上とリスク回避を図り経営の安定化につなげた。

石川県 JA石川かほく
松井 博暉氏
JAグループの総合力を発揮した担い手への総合事業提案
大規模小松菜生産者に対し、袋詰め機械の導入検討から作業方法、人の配置等に先進地視察や全面的に支援し、効率的な作業体系を確立した。
水稲生産者に対して、農福連携による労働力不足の対応や新技術の導入、新規作物の作付け提案や事業承継における話し合いの場づくりなど、生産拡大とコスト削減に貢献した。

滋賀県 JAグリーン近江
和田 洋氏
担い手の安定経営に向けた総合支援
持続可能な経営に悩む担い手へアジアGAP認証取得を提案。全従業員で先進地視察や現場におけるGAP基準項目の確認を行うなど、認証取得を明確な目標と位置付けて取り組んだ。防除におけるドローンの活用を提案し、機体の購入や操縦にかかる技能認定講習費用の資金を支援し、効率的な防除作業に寄与した。

滋賀県 JAグリーン近江
井口 太輔氏
准組合員がつなぐ地域農業活性化への道!!～野菜生産部会再生と准組合員が農家労働支援!?～
休止状態の野菜生産部会の活動を再開し、担い手同士が自主的・自発的に研修や意見交換ができる「学びの場」づくりを実施した。地域特産品として黒枝豆の作付けを提案し、「能登川黒ダイヤ」という商品名で販売。選別から袋詰めまでの作業負担軽減策として、准組合員の作業支援により課題解決を図った。

島根県 JAしまね
片寄 俊一氏
有害鳥獣対策は俺に聞け!!
担い手からの有害鳥獣による農作物被害の相談に対し、狩猟免許、鉄砲所持許可を取得し、猟友会に加入することで有害鳥獣駆除員として活動を開始した。また、ベテラン猟師を講師としたわな作り講習会の開催、集落営農法人へワイヤーメッシュの効率的な設置を提案し、担い手の有害鳥獣対策の底上げを図った。

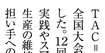
島根県 JAしまね
山田 光俊氏
水稲多収穫米栽培による営農法人の所得の安定化
水稲生産農業法人のさらなる所得増大に向け、多収穫米栽培を提案。指導体制の確立を図り、定期は場巡回や生育調査、刈り取り適期判定などによる支援を実施した。その結果、多収穫米栽培は場の反当たりの販売金額が従来の作付けによる販売金額を上回り、担い手の経営安定化と多収穫米の産地拡大につなげた。

佐賀県 JAさが
川内 辰彦氏
次世代へつなぐ事業承継支援と農家手取り最大化に向けた生産資材コスト削減対策の提案
経営移譲、承継に悩む親子に対して、事業承継ブックを活用した話し合いのきっかけづくりに取り組み、経営状況の把握、事業承継計画の作成と実践を支援した。また、大規模農家からの生産コスト低減に関する要望に対して、農薬担い手直送規格、肥料の事前大口予約購買などを提案し所得増大に大きく貢献した。

熊本県 JA本渡五和(ほんどいつわ)
山下 清弥氏
地域の水田農業を守る営農組合との関係強化
「JA本渡五和集落営農組織連絡協議会」を設立し、TACが事務局となって集落営農組織間連携による地域活性化に取り組んだ。新規作物の導入にあたり機械の共同利用、共同出荷を提案し新たな収益確保につなげた。また、Z－GISの導入を提案し、農地管理や作業の効率化につなげ、地域の農地保全に貢献した。

参加者による 分科会

参加者がテーマごとに5つの分科会で議論しました。



分科会1 TACの体制と人材育成

担い手に出向く活動は着実に定着している一方、JAの機構改革や人事異動により、体制が縮小し、活動が停滞するなどの課題を抱えるJAも多く、体制整備や人材育成、訪問活動時のPDCA管理が課題となっています。

今後のTAC活動の拡充やTACの設置普及につなげるため、表彰JAの取り組みの目的、体制や活動内容、担い手の評価などについて紹介、また外部講師による、部下の主体性を促す組織マネジメントに関する講演を受けて、参加者同士で、現場での課題抽出や対応策の検討、今後の実践について意見交換を実施しました。

分科会2 農業労働力支援

後継者不足や基幹的農業従事者の減少、高齢化により地域農業の存続が課題となっています。そのため、地域農業の維持発展には、担い手による規模拡大や新規就農者の確保・育成とあわせて雇用労働力の確保が求められています。

全農大分県本部などの労働力支援の取り組みを紹介した後、TACとして取り組む労働力支援についてグループ討議を行いました。参加者は、労働力の効果的な募集方法、長期的な雇用対策、作業の体系化や機械化による労力軽減などについて活発に議論しました。

分科会3 農業後継者の育成支援

農業者の減少や高齢化により農業生産の基盤維持が懸念されている中、今後の農業界を担う若手農業者の育成支援が求められています。

若手農業者が農業後継者の育成に関する現状と課題について講演を行い、「生産者が事業承継の意識を高め、早い段階で考えることが重要」と共有しました。

JAとしての農業後継者の支援策について若手農業者を交え、グループ討議を行いました。全農が作成した「事業承継ブック」を活用し、事業承継の実践につなげたい、就農者と離農者のマッチングが重要、経営に関する研修が必要である、などの意見が挙げられました。

分科会4 担い手が求めるスマート農業

担い手農業ICTに対するニーズが高まる中、効率的な作付けや作業計画等の圃場管理ができる営農管理システム(Z－GIS)を中心にスマート農業による担い手への営農・経営支援について議論しました。

Z－GISの操作方法や全国での取り組み事例を共有し、普及にあたっての課題やTAC活動の中でどのように応用できるかグループワークを行いました。

参加者からは、農業祭でデモを実施するなど展示機会を増やして認知拡大を図るといった普及方策や、ほ場日誌等新たな機能を追加する、さまざまなシステムとの互換性を向上させ、現場で活用しやすくするといったアイデアが出されました。

分科会5 6次産業化

農業振興や地域活性化を進める上で、農業の新たな価値の創造が求められています。

ところの訪問活動でTACが聴き取った担い手の要望や課題を踏まえ、①農産物加工②販売流通③商品開発④直売所運営⑤観光農園の5つのテーマに分かれ、地域の特産品、特徴を生かした具体的な企画立案に向けて、6次産業化プランナーを交えた議論しました。

品ぞろえの充実やマーケティング調査に基づく商品開発が基本といった意見から、全国のJAの力を結集したブランド力強化戦略の構築、観光資源としての農業生産現場の魅力発信、規格外きゅうりの肥大化による食器利用といった斬新なアイデアが出されました。

TAC(タック)とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の全国統一愛称です。

TACの役割や活動状況については、TACのホームページをご覧ください。TACのLINEスタンプもできました。若手農業者とTACのコミュニケーションツールとしてお使い下さい。

TACのホームページ

TACのLINEスタンプ